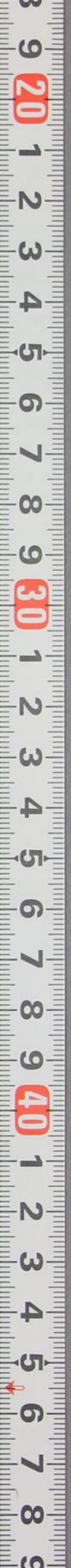


新板

鉄槌

下之本

谷



奉とあまのひさうしなる

おれはもかひらたわらりるこもふ

いふのあまのひさうしなる

みことの夢のうれはりりり

おゆけりあまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

あまのひさうしなる

以 弁 乳 世 江 待 後 贈 益 結 奇

あまのひさうしなる... 松五粒者... 新羅多此種

あまのひさうしなる... 松五粒者... 新羅多此種

と終りて多に... 伊勢大捕

いふのちの... 古今存... 内裏... 異凡射

詩山櫻... 吹雪渡... 二月... 東坡詩

二月... 東坡詩... 系梅... 系梅の... 系梅の... 系梅の...

梅ひさる... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の...

家郷... 東福明院内侍

杜牧詩... 前大納言爲世

謝美運... 謝美運... 謝美運... 謝美運...

名の方... 格後... 失道... 失道...

梅ひさる... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の... 系梅の...

ふとふ 此巻のふとふとて通

つとふ 杖あり

月令の菊有黄花

龍膽

山谷詩遺金満

伏波將軍

親族故旧

半銭の奴

悲田院

拾芥

西野

病者

吾妻人

て果ては西の道にあらん

死に成すは

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

失道

可氣象

かじりあつしほびしてびて中ら... 大和國の七太寺の

西大寺 大和國の七太寺の

平勝賢元年創之至天本神

護元年十七年造畢講續

日本記

西園寺の内大臣 實徳公也

左府公衡公の男又竹林院し号

資朝卿 權中納言從三位

檢非違使別當後醍醐天皇

時人也日野俊光卿三男

むすぶひて 莊子よ號

のほほしくむすぶひて

為兼大納言 毘沙明堂

早 定家 為家 為教

為兼 權大納言正二位應

長元年依勅撰進玉葉集

正和元年美賢之同二年十

月十七日勅長友同四年十二

月廿八日東使として出づ

信渡へ流罪にさへ公卿浦

大和國の七太寺の... 實徳公也... 資朝卿... 檢非違使... 時人也... 莊子よ號... のほほしくむすぶひて... 為兼大納言... 早 定家... 為兼... 長元年... 正和元年... 月十七日... 月廿八日... 信渡へ流罪...

任よみえたり 武院よ為兼

佐渡嶋へ流きて和手此三首

六波羅 北条家兩人の二

族と系教よとさ多内而國の

のたりのひもとまふはれ

尾すよ體よ群あり

い人 資朝くはと信を資

朝のまよとちるせらふ人とも

ふ志氣あふみの今あつす

かふ山あり

失進 五三

くふたひひるれくせものかむ... 風雅集よ為兼... 佐渡嶋へ流きて... 六波羅... 族と系教... のたりのひも... 尾すよ體... い人... 朝のまよ... ふ志氣... かふ山あり

後醍醐院

人皇八十七代也

土御門第一皇子

高倉院女院承

子也平清盛女也

藤原伊行女也

右京大夫

平資成通平資盛

系本支後醍醐院の即位の儀より

式も申しらるるに

人のり

人のり

論語子游曰右瞻基滅明者

行不由徑非公車未嘗至於

儻之室

るをてるをばくく

ひしげに

ところりて

んとも

我と心

何より

阮籍

竹林の七賢の

晋書阮籍字嗣宗不抱礼教能

為青白眼對之及嵇喜來吊籍

作白眼喜不擇而退喜弟康聞

之乃齋酒披髮造寫籍大悅乃

見青眼由是法礼之士疾之若

讎籍時空意獨駕不由徑路

車迹所窮輒慟哭而反

人のつぎ

つぎ

則ち

て人の神

人よ

み

棋盤の角

後漢書

某

彈碁

二人

失進

まごころの折たるを流るるはみ

録倉中書王

後醍醐院第上の

皇子宗尊親王一品中務卿征

夷大将軍北條よりん流るる

て將軍よりりる中書八中

務の唐名をハ親と云

佐々木隠岐入道一 東鑑四十

建長二年十二月二十九日

隠岐太郎左衛門入道心願

者佐々木隠岐前司善清嫡

男幕府近習也後出家道世

訖云云若狹前司兼村度

々争座着上下之事而及噴

噴故今及此云

歸のり

晋書陶侃嘗造

船其木屑并頭皆金藉而掌

之其後元會大雪始晴廳事

繪濕於是以前掌木屑布地

為陳之題陶侃詩曰致力中

原下無重并頭木屑是功名

吉田中納言 藤房秋

万里小路吉田と号す

宝劍 所村未れよりりる

の侍五の事ありと云

後念中書よりりる物と云

ついで後まごころの流るる

せんごころの流るるに依り

まごころの流るるに依り

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

よりりるに依りまごころ

漢書のりもをり日記よ書り

隆親 四糸隆李隆房

隆親 隆親 二位檢別當

崔氏錫食經曰鮭 折清反和

案俗用鮭字非也 其子似

鮭音注今案鮭魚一名 其子似

赤光一名年魚春生年中

死故名之 凡魚と生か

とて鱸魚と云串に

わさうり代鮑魚と鮑魚

とて法魚と云揚

うり鮭魚鮑魚鮑魚鮭

魚と云本草綱目よりの

東鑑第十建又元年十月十三日

賴朝於蓬江國菊河佐木三島

盛綱相敵小凡於鮭鮭鮭鮭

味頗懇切早可聞食狄云殊

御自愛彼折敷被深御自差曰

鮭のり

和名曰鮭魚一名鮭魚

和名安由揚武漢語抄云 春生冬死故各年魚宗廟と多るに

鮭魚又曰細鱗魚 春生冬死故各年魚宗廟と多るに

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚鮭魚

則力佛也注佛謂換轉其首

恐其味之害人也畜者不然

頌其性也又曰效馬效羊者

右牽之效大者在牽之止效

陳辭也以右牽牽之為便也

以左牽防其齧也事文類

聚云度泉遺世不仕牛馬有

蹤蹟者恐佛人不驚於市

周書西旅貢獒和保及作旅獒

國注獒犬首四足能知人心

大有觸趾蹠咬人而記號

產絕人者截兩角踰人者

時類 關東の執權正五位

下相模守号最明寺法名

道崇くりく東鑑元序紀言

北條 平時政義時泰時時氏

松下禪尼 東鑑四十四建長

六年十月六日相州室座安子

加持若官僧正隆辨驗者清尊

僧都也與別房松下禪尼相

別等群集為安東左衛門光成

新
鐵
槌

下
之
書

九十号

正
本
給

谷